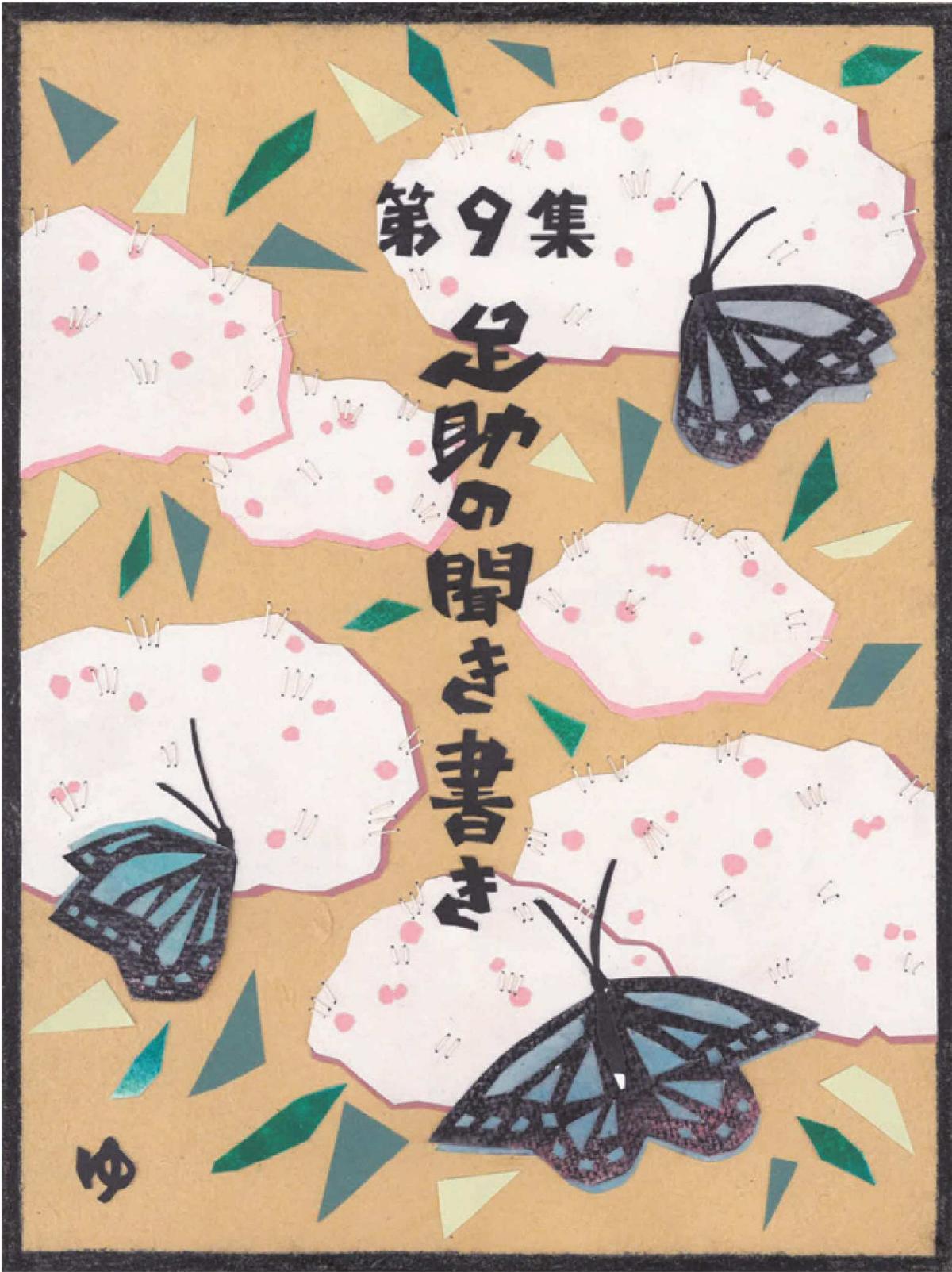


第9集

足助の聞き書き

9



# 足助の聞き書き 第九集



## 聞き書きとは、

話し手の話した喋り言葉だけで作品が構成されています。

しかし実際は、話し手と聞き手の会話から作られていくものです。

ですから、話し手と聞き手の人間関係、信頼関係が作品に表れてくるものだと思います。

自然の生長量の中で、持続的に暮らしていた石油に依存する生活になる以前の暮らし。

その暮らしの知恵を聞き、伝えていくというのが聞き書きの意義です。

聞き書きが在るか無いかで集落の実態像は違って見えます。

歴史を埋めてきたのは人々の感情。謙虚で真摯に生きてきた人々です。この地域で生きてきた人々が、どういう思いを持っているか。農作業や自然をどう利用したか。ど

ういう人と助け合って生きてきたか。民俗調査では埋めきれない行間部分が、この地域には、こういう思いの人が暮らしているという証です。作品を読めば、十人中八人は話し手に興味を持ち、その人が生きた風土を好きになります。

この聞き書きが足助の地域づくりにつなげていってほしいと願います。

澁澤寿一（NPO法人共存の森ネットワーク理事長）

# 目次

つくり続けてたら、「からくり小路」って呼んでくれて……………4

浦野うらの 良美よしみさん (足助町) 聞き手・井上美知代 (岡崎市)

みんな大事にしてくれて、嬉しかったね。……………16

安藤あんどう佐久さくこさん (大多賀町) 聞き手・浦野友理 (大平町)

日本は神の国・男子は神の子という教育だった……………27

本藤ほんとう 銚一しゅういちさん (国谷町) 聞き手・野田侑希 (太田町)

高木伸泰 (則定町)

パレット前史

シベリア抑留者は生き延びて町唯一のスーパーマーケットを築いた………40

村上 鐘一さん (足助町)

聞き手・島塚土(桑田和町)

村上多美子さん (足助町)

第九集 表紙

第九集 表紙 コラージュ 浦野友理(大平町)

今回は聞き書きでお話を伺ったのに、文章として残す事ができなかつた、大多賀に咲くフジバカマとそこに訪れるアサギマダラをイメージし制作しました。

あとがき

足助の聞き書きマップ

# つくり続けてたら、「からくり小路」って呼んでくれて



うのの よしみ  
浦野 良美さん (足助町)

昭和六年十二月十八日生まれ（八十九歳）

小原地区の沢田町に生まれる、小学校四年生のときに足助町に引っ越し、足助尋常高等小学校を卒業。十七歳で東海電気（現トーエネック）に勤務。定年後、体調を崩し入院生活の中でものづくりの楽しさと出会い、自身でつくったからくりを並べ道行く人々に笑顔を与えている。その功績が「世間遺産」として認定されている。

## 小原から足助へ

昭和六年十二月十八日に小原の沢田町で生まれました。親父さんとおふくろさんと姉がふたりと自分の五人で。昭和二十年に一人姉さんが亡くなって、もう一人の姉さんは学校下において、九十二歳になります。

親父さんが電気の仕事をやっとして、小原電灯に入っとして、小原だけで仕事をやっしてたわけね。

小原電灯が東邦電灯と合併して、ほんで、仕事の範囲が広がって足助へ転勤になった。昭和十六年の夏休みのうちに引っ越して、二学期から足助小学校へ変わったの。今の本町区民館の場所に東邦電灯の事務所があっして、散宿所さんしゅくじょつちゆっして、そこで住んでたわけ。

ほいで、ここから小学校へ通っとしてたわけね。

小原のなかでも、道慈小学校は奥のほうだったから、うちから四キロくらいで、遠くて場の悪い高い所だったからね。それ思えば足助小学校はすぐ近く。だから、こっちへ来て遠足やなんかでも足が疲れたうちゅうことはなかったね。

よそから来たんだけど、みんなよく遊んでくれたのよ。いい友達で、仲良くしてくれてね。当時だとコマ回しだとか、四角いケンパン、かつちん玉（ビー玉）とかそんなようなことやって遊んでおった。そこら辺の竹を切ってきて、竹馬だとか自分で作りよつたもんね。川も行ったよ。すぐそこだからね。ウナギ捕れよつたよ。川で捕れたって喜んでうちまで帰ってきたら、糸に巻き付いちゃつた。小原だとそんな川がないから、水泳ぎなんかやったことないじゃんね。こっちへ来て、夏になると水泳ぎ。まだ、紙屋淵かみやぶちつて、ちよつとした水たまりがありよつたんだ。「泳げ、入れっ」て言われて押し込まれよつたもんで、そんで、ちいとつ（ちよつとずづ）、泳げるようになったんだけど。

## 戦争

昭和十八年、ちよつど六年生ぐらいから戦争が激しくなってきた。運動場全部起こして、イモを植えて、イモ刺して、それを食料にもしとつた。授業やるよりもイモ刺しとつたっていう感じ。その当時は先生が「授業はいい。おまえたちは、今、戦争がこれだけ激しなつてくると、南方へ行っちゃう。南方へ行って戦争やるだで、どうせ死んじゃうで、そんな勉強せんでいい」つて。そういう時代だったわけね。

戦争中の足助小学校は、在郷軍人の人や兵隊に行つて戻ってきた人だとか、青年団だとかいう人ね、そういう人が足助小学校へ来て、今の自衛隊みたいな格好でここに住んで守つとつたわけね。何かあつたときには出るうちゅうことで。教室もこの衆に取られちゃつて、それまでは男と女は教室が違つとつたけど、男女一緒の教室になった。

小学生でも消火班とかを作つておつて、わしは監視班だった。今の足助グラウンドに小さな小屋があつて、何人かで交代で上がつて見てたんです。わしが上がつて見とつたとき、敵機が爆弾落とした。何かえらい音がしたなと思つたら、足助高校

のちよつと向こうに落としてった。最初、日本もきれいな飛行機できたなって見とつたら、B-29 敵機だった。

食べるもんは、イタドリの子葉っぱだとか、イモの茎を食べよつたね。結構、おいしいよ。こんなこと今言っちゃいかんけど、親父さんが電気の仕事でほぼ出とつて、田舎のほうを回つとつたから、野菜もんとかいりいろいろもらつてきてくれたことがある。感謝しとる。

## 電気の仕事

昭和二十一年に尋常高等小学校を卒業してから二年間は、足助木工へ行つた。今の新田町の八百武さんのところに事務所があつて、裏まで工場があつた。

昭和二十三年の八月に足助木工から東海電気へ変わった。東海電気は今のトーエネック。外線と内線と仕事に分かれておつて、私がやつたのは内線。電柱から家の中へ電線を引いて、電気が使えるようにするほう。新町の小松さんのところに事務所があつたんだわ。で、事務所があかつき写真館さんの東隣、今は駐車場になつてる場所になつて、最初はそこへ勤めさせてもらつた。

東海電気に入ったとき、親方が一人おつて、先輩が二人、事務が一人おつたから、全部で四人から五人ぐらいいた。もともと電気の勉強は全然してない。今じゃ、学校出てふらふらしとるやつなんて使つてくれへんわ。この当時はこんなやつを使つてくれて、おかげで定年まで使つてくれたもんで、ありがたい。わしは東海電気、トーエネックには感謝せにゃいかんと思つておるだけんね。

わしらが入つた頃には移動は全部自転車。すごい坂道の所はリュックに材料積んで、ほいで歩いて上がつてつただもんね。仕事に行くのにそういう具合。自転車で行くと、いろんな荷物は持つてかにかいかん。自転車の後ろに、みかん箱ぐらいの専用の箱を作つて、ほれで積んで持つてく。電気の線とか、碍子がいしとか、道具。碍子は瀬戸物で、箱に入れてくとやかましく

てね。ガンガンガラガラ。それで、道が今みたいなアスファルトじゃないし。ダーツと自転車で走っていくと、子どもたちは電気屋が通ってたつていう。

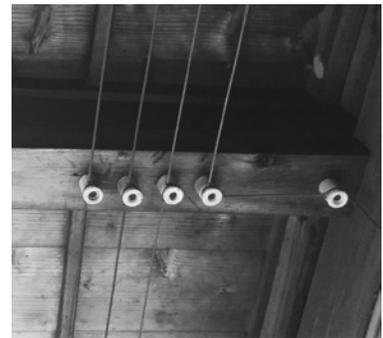
最初の仕事は上佐切だった。とにかく一生懸命、自転車で親方に付いて行った。自転車に乗りつけてないから、坂を下りてくるつちゅうと、おそがい（怖い）ような感じあったもんでね。

朝八時に出て、一時間くらいかかって佐切に行つて、九時半くらいから仕事始めて、弁当食べて、四時ぐらいまでやつて。一日行つて、だいたい済まかいて（済ませて）帰つてくるつちゅうわけだね。

稲武とか遠い所は泊まりながら、行つたもんね。稲武の大桑、一番高い所、あそこ行つたとき、ほれこそ全部材料やなんかを持つてつて、ほんで、泊まらしてもらつてやるだもんで。その家をすまかすと、そのうちの人が次のうちに荷物を運んでつてくれて。ほうして順番にやつつた。みんなにしてみりゃ、電気が引けてありがたいもんで、ありがとねつて言つてくれて。

宅内の配線はちっちゃい仕事だけど、工場とかの増設工事とか、新增設工事やね、学校もやつたよ。会社とか工場とかを大きくするもんで、こつちにも引いてくれとか、そういうのは大きい仕事つてこと。大きい仕事になると、持つてく物とか材料とか、手順とかがまた違つてくるんだよね。

ほれでね、受けるところが違つと、仕事ももらえん場合があるわけ。何とか木材さんが受けて、こつちに電気の仕事を頼んでももらえればいいけど、全部もらえん場合もあるわけ。東海電気に電気工事をお願いつて頼まれるわけじゃない。建築会社みたいなどは、結構、電気も内装も抱えとるのはいくらでもあるわけ。なんの仕事も全部抱えとつて、ほれでその建築会社が仕事を受けると、抱えとるところがくる。大きい仕事だと大きい会社が出て、小さいつていつたら、おまえんところやれつ



磁器（白い磁器製品）

ちゅう感じだね。建築会社とか、そういうのも、いろいろ難しいところもあるだね。だから全部やらしてくるっちゅうわけにもいかない。

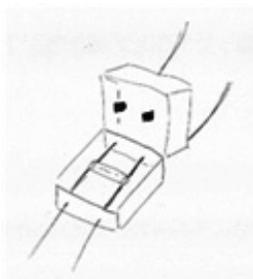
## 昭和二十年代は定額電灯

わしらが入った頃は、定額電灯。電気料金が電球の数できまつた。電球一個で一回線つてことで、その電球が何ワツトで幾つ付けてあるかちゅう勘定でやつとつた。

家のどこか一か所に電球をつけとく。その電球にコードがすごい長く付けてあったわけ。ほいで、使いたい部屋へその電球をもつていって使う。電球を二つ付けちゃうと金額が上がっちゃうし、電気料もある。田舎のほうへ行くと家が大きいからね。それで、四部屋あったとすると、どの部屋にもコードを伸ばせば届くようなところの部屋の隅のほうに付けといて、隣の部屋に欲しいときにちよつと持つてつて明るくすると。コードをどえらい長くしといて、こつ四部屋回れるようにやつただよ。そういう電気の点け方だった。

## コード二本で家に電気を灯す

電柱から電線コードを二本引いてくる。プラスの線とマイナスの線、それぞれの線を碍子がいしに縛り付けて、うちの壁のどつかに穴をあけて引き込む。今じゃ、二本の線とか三本の線、家の中に引くでも、一本にまとまつてるでしょ。でも、われわれがやつた頃には、二本を別個に付けてつた。昔は線のカバーが外でも布だったから、すぐ破れて裸になりよつたんだわ。丸裸んなつて二本がひつつかと、シヨートしちゃうわね。石油製品ができるようになって、布じゃなくて、ゴムとかビニールっぽいやつになつて。今のやつはビニールでかぶつてるもんで、引つ付けてもどうつちゅうこと



開閉器イメージ図

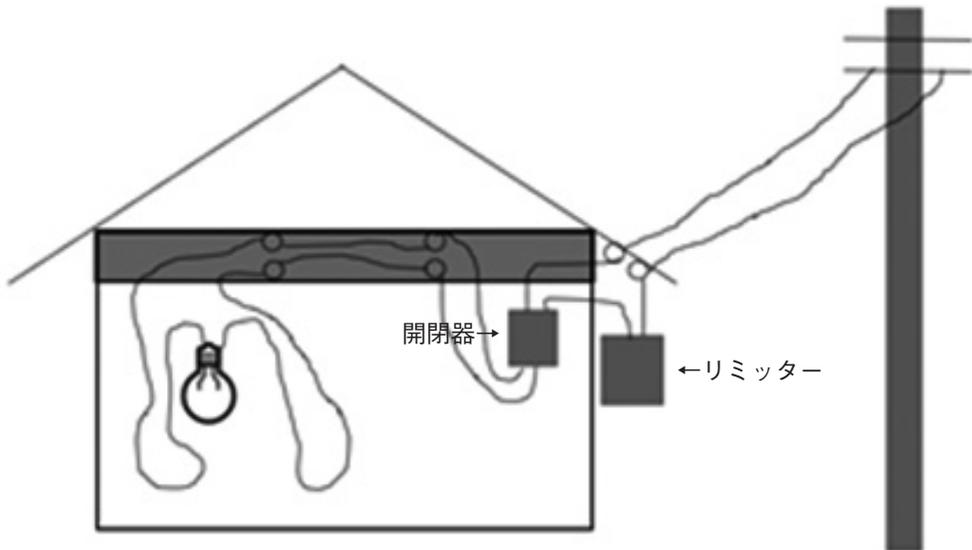
はない。昔はこれ、作業して下手くそだったりすると、バチッてなっちゃうよ。ほんで、何やっとなるんだって怒られちゃう。

引き込んだ家の中に開閉器ってスイッチ、いまでいうブレーカーみたいな役目のを付ける。昔は陶器できてて、四角くて四、五センチくらいの大きさで、「おかめ」って言いよった。本当におかめさんの顔みたいな格好をしとった。これにヒューズが入とったわけ。ふたを閉めてヒューズが引つ付くと、電気が通じるつちゅう。ほんでヒューズが落ちると、電気が落ちるようになった。それがふたなんだね。

しばらくすると、今度は電気を部屋に一つずつ欲しいとなってくる。いくつも付けると、メーターでなきゃ勘定がしくくなってくるもんで、メーター器が付いて、今の時代みたいになっってくるわけ。ほれでも、これまでには四、五年かかっと思う。

メーターがつく前は「リミッター」つちゅうのを付けとったんだわ。ヒューズがたくさん入とって、電気をようけ（たくさん）使うと切れちゃう、このヒューズが飛んじゃうわけ。陶器の中に、風車みたいなのがあって、その羽が十枚くらいで、それにヒューズが全部付いとるわけ。ほれでひもがついとって、それを引つ張ると回転する。ヒューズが切れるとひもを引つ張って回転させて、次のヒューズがついて、電気がつく。

昔は、電球を一回線つけといて、余計に使おうとして、勝手に電球を



宅内配線イメージ図

つけて用足そうかつちゅう人もありよったもんで。ほんだで、盗んでちゅちゅあ（盗んでと言つては）いかんけど、よけいに電気を使えないようにリミッターがついとつた。容量がオーバーするもんで、ほれで、リミッターのヒューズが飛んじやうと、電気がとまるようになつとつた。ヒューズがきれると、ひもを引つ張ると、付いたちゅちゅうことになる。

おかめの手前に、リミッターがつく格好。だから、おかめのヒューズは飛ばなくて済む。お

かめの中には、割と大きいヒューズが入つとつたから、ヒューズがそんな飛ばなかつた。今の人は知らないと思うよ。この辺でいくと、あまり場が良くないのは綾渡の辺。一日一軒やるのがやつと。それでも今みたいな難しいものを付けるじゃない。ただ、われわれの頃には、コード二本持っていけば電気が点く。三本持っていけばモーターが回るちゅちゅう格好だつたから。あとは、道具と碍子。結構重たかつたんだよ。

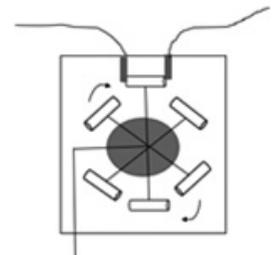
今じゃどこ行つても遠くでもやれるけど、昔は山の中でも電線がないとだめ。遠くの一軒家なんちゃで、やつぱり入らん。電気入れなくて。われらが入つた頃からは、だんだんそういうのが少なくなつてきたけどね。

我々が始めたころは、電気の原始時代だね。でも、昭和三十年ぐらいには今みたいにメーターでスイッチがあつて。だから、原始時代のやつを切り替える仕事結構あつたね。今度はメーター付けるっていう仕事があつたわけ。

本当に日々進化してるとだよね。今、中部電力でもメーター器なんか見に来なくて、全部向こうでやつてるから。あんたんとこは今月幾らだ、何キロ使つたつちゅつて、全部手紙でくるだけ。八十代の終わりの人じゃ、夢のようだよ。考えてみたら本当すごい。

## 結婚

親父さんが勤めとつた東邦電灯もだんだん人が増えてきたし、親父さんも定年したで、散宿所をでて、今の家に移つた。



リミッターイメージ図

結婚したのは昭和三十年。私が二十四歳、奥さんは二十二歳。小原にいたお婆さんが奥さんを連れてきただ。結婚式は足助の家でやった。神主さんなんておらんよ。部屋に二人並んで座つとつたぐらだよ。他には親戚だけかな。小原から来たのは、紹介してくれたお婆さんと義理の兄さん。昔はついて行っちゃいかんて言いよつたもんで、親は来んかった。足助は私の親と姉さん。それから、寿家の娘さんとただし君が、三々九度やつてくれた。あと松栄町の山田さんがご飯をつくってくれたな。昔は何か寄ることすると、人が決まつとつて作つてやりよつただね。

奥さんは、花嫁衣裳を小原から着てきた。小原の峠で一本松つつかつたかな、一本つちゅうことは縁起が良くないって、嫁さんは通つちやいかんつちゅうことがありよつたわけだよな。そこを通らんようにして、タクシーで一時間はかかったよな、あの時分だと。

電気の仕事が忙しく、あまり休みもせんかったよな。あの時分に日曜日が休みなことあれへんかった。雨が降った日に休む。ほしたら、ほほ休みなくずつと働いちゃつて。日曜日がないもんで子どもたちと全然一緒にどこも行けんかった。みんなで旅行行くつていうのもなかった。新婚旅行はもちろんなかった。

子どもは男の子ばつか三人。みんな、外出ちやつたもんでね。みんな全然違う仕事になつてます。長男坊が春日井、次男は豊橋。三男が岡崎だもんね。誰もうち継いでくれない。孫は四人。こないだ生まれたのはひ孫で男だった。



あかつき写真館で撮影した記念写真

## 足助の職場からトヨタへ

昭和四十一年に、足助の事務所が無くなって、陣中の事務所へみんな変わったわけね。私は陣中の事務所に行って、そこから、トヨタ自動車の上郷工場さんへ通ったわけ。その年から、とにかく土日がなくなっちゃったんだよね。順番に機械の移動だとか、そういうものをやるわけ。機械の移動つちゅうのは、作るラインの機械を移動する。ほだで、土曜日と日曜日は大概行かにかいかん。うちにおれんかった。十二月三十一日まで仕事に行きよったね。そいで、一月の三日ぐらいから行きよった。休みなかったで。よそへも応援とかそういう具合で行ったんだけど基本的にはずっと定年まで上郷だった。

ほだもんで、子ども連れてどっかへ行ったなんてあんまりなかった。それはかわいそうだったな、子どもはみんな。昔は仕事優先だもんでね。だから、会社で出てくれんかっていわれちゃあ、じゃあ、しょうがないなって出よったもんで。

## ものづくりの楽しさに出会うきっかけ

平成三年にトーエネック（平成元年に東海電気工事株式会社社名変更）を定年して、スケートセンターに働きに行った。いままで何の病気もしとらんかったけど、スケートセンターに一年務めて、喘息が出て辞めさせてもらった。やっぱり、定年で辞めてほっとしたのかな。

最初は、岡崎の病院行ったんだわ。大島の林医院が岡崎に病院を移したもんで、ほれを頼って行った。一カ月近く入院しとった。落ち着くまで入院しとって、先生に「いいよ」って言われて退院するけど、治りきってないもんで、ちよっとする



昭和 40 年代のころの写真

とまた悪くなっちゃって、また入院してっていうのが繰り返された。えらかった、そのころは。

林病院（岡崎）に入院したとき、一緒の病室に入るとる人がPPバンドのかごを作っとって、ほれで「看護婦さんに叱られへんか」って言いよったけど、ここで作ったやつをもらって、作り方を教えてくれて、それで覚えて、それで始めるようになった。それからまた傘を作る人がおって、作って。大体作ることが好きだよな。

定期的に診てもらうのは足助病院。足助病院で診てもらおうと行ったとき、発作が起きて、意識が急になくなって。それで一カ月ぐらい入院した。それから喘息は出とらん。ちよつと出てもそんな入院はしてない。ほんだで、風邪だけは引かんようにって、薬は飲んどるけどね。

でも違う病気でまた入院した。ヘルペスができて、口の中に。ほれで、かたいだ顔が余計かたいじゃった。ほれで、目でもこうなんでね、入れ歯が入れてあつたけど、そのときには調子が悪なっちゃったもんね。ヘルペスで、腫れちゃったけど、切らずに済んだ。薬で治したけど、結構時間がかかったよ。しばらくは、食べるもんもだつて、食べれんよね。あれで半月ぐらいは足助病院に入院しとつた。足助病院の常連さんなっちゃったね。

### 夏祭りの作品づくりが、今のからくり小路に

平成五年に足助の夏祭りで作りの物の展示を始めたわけ。白木屋さんからえびやさんから、自転車屋さんから、ずっとみんな作り物をつくつとつた。俺もやってみようかなって、つられてやってみたのが始まり。

最初作ったやつは区民館から上がってきてすぐのところ飾ってある水車のやつ。夏祭りの時には区民館に飾らしてもらつとつて、自分が作った作品をみんながまあまあに評価してくれたもんで、壊すのがもつたないなくて、今の場所に飾つたわけ。そしたら、みんなに「涼しいよういでい



最初のからくり



「からくり小路のからくり作品と楽しむ人々」  
 いわ「って言われて、評価してくれたもんで、それが病みつきになって毎年作りだしたら、順番に増えてった。それが今では、「からくりの小路」って、いつの間にもやらそんな名前が付いとるみたい。



お孫さんの成人の記念写真



浦野さん個人とからくり作品が「とよた世間遺産\*」に認定。認定書の下には、からくり作品を楽しんだ方々からのメッセージも紹介されています。  
 \*とよた世間遺産とは、モノ・コト・ヒトに対し「面白さ」を未来に受け継ぎたい価値をもち、NPO法人地域人文化学研究所の認定委員会が認定する。

たくさんの未完成が、いつか、日の目を見るかな

なんか動くものを作りかけて、いい具合にはかってある。それで、何年かたってから思い出して、また作る。せっかくこ  
んだけ作つとるもんで、続きをやるかって。アイデアが湯水のごとく出てくるわけじゃないし、設計図を書いとつてやるわ  
けじゃないもんね。考えに詰まって、できんくなるとやめて、据えといて、またそのうちに引っ張り出してきて作つとると、  
そんなうちに、「あー、できた」つちゆうようなこともある。作りかけのものは、大体日の目を見とるよ。うちの中にそう  
いうもんばつかある。開けるとびっくりするほど、こっちの部屋も、こども、押入れん中も。よその人じゃ考えれん、多分。  
材料は、木材と電気のもーターとか。電気関係の材料はどつかでリサイクルを探してきて、新品は使つてない。壊れた電  
気製品とかもほかれんよ（捨てられない）。もーターを外して使うとか、材料に使うもんもあるもんで、余計うちん中ごた  
ごた。「終活せにやいかん」つちつて言うんだけど、できんだよね、拾ってくるほうだも  
んで。

この年になってテレビ見て座つとるよりはいいかなと思うんだけど、本人が一番楽しんど  
る。毎日、ごそごそやっちゃおる。おかげと、やれるもんでいいだわ。ごそごそやれるつて  
ことは、手先も動かすし、ありもせん頭もちつとは使うかもしれんし。子どもが、「何を食  
べたか忘れてもいいで、食べたことを忘れんようにせりんや」つて言ってくれとる。

新婚旅行も行かんかったもんで、そのことを奥さんに言われるけど、今からじゃあ、もう  
動けんくなつたから、あと何年持つか分からんけど、こうやって二人でおりゃええわつて。

いろいろな人にもお世話にもなつとる。それでここまで来れた。人様やらいろいろみんな  
に。何もかもお世話になつてここまで来れた、何とか。

【聞き手・井上美知代（岡崎市）】



季節ごとに模様替え

取材期間…平成三十年十二月〜令和三年二月

みんな大事にしてくれて、嬉しかったね。



安藤佐久子さん (大多賀町)

昭和十一年七月二十五日生まれ（八十四歳）

旧名倉村（現愛知県北設楽郡設楽町）に八人兄弟の四番目として生まれる。

昭和三十四年に大多賀に嫁ぎ、三人の子供を育てる。いこいの村愛知の発起人である日那さんと共に、百姓やいこいの村愛知で働く。お琴を趣味にしていた。

現在は、特別養護老人ホームへ日那さんの様子を見に行きつつ、県内に住む家族に支えられながら大多賀で一人暮らしをしている。

※大多賀町は足助地区の東部に位置し、標高千メートルを超える寧比曾岳がそびえる

## 在所の名倉

私の在所は名倉です。名倉は広いよ。村だったもんね。どえらい田んぼがたくさんあって、私の実家は百姓やとつた。家族は、両親とお祖父さんお祖母さん。昔はね、隠居って言って、お祖父さんとお祖母さんは建物も別で離れとるところに隠居暮らし。ほいで八人兄弟でね。おかげさんで、上の兄さん二人はもう死なれたけど、今も女五人元気なの。

父親はなかなか厳格な人だったよ。大事に育てられただね。行儀はよかった。お母さんは、お父さんに従う、言われた通り「はい、はい」で夫婦喧嘩もしない。素直つちゆうだか、おとなしいお母さん。

お父さんは戦時中に在郷軍人で、戦争には行かなかった。鉄砲担ぎでね、冬になると山に行かれたわ。ついて行ったことはないけど、ウサギだとか山鳥やイノシシも撃ってきたことあるよ。鳥は毛を抜いて、ウサギは皮を剥いで、板に張ったり

してね。私はそんな見とるよ。しょっちゅう捕ってくるもんでね、別に気持ち悪いとかなかった。肉や骨やらで、うどんの出汁にするじゃん。昔は肉なんかなかったもん、ご馳走でね、骨なんかしゃぶったりしてね。みんなが米がないちゅっても、わたしんとこ畑や田んぼが広がったもんで、そういうことはなかったもん、良かったよな。

小さいときは田んぼの手伝いもしたけど、学校でいつまでも遊んできちゃあ怒られちゃあね。小学校は名倉小学校。昔は、小学校に一番多い時、六百人くらいおったんだよ。わたしんとうのクラスは七十人くらいおった。勉強は好きだったよ。小学校の時に、終戦があった。戦中は、空襲警報だなんちゅって、弾が落ちたり、怖かったよ。中学校は、名倉中学校。わたしんとうが、第五回生。そのあと、私学校に行きたかったけど、兄弟が多いもんで行けなんだ。ほいで裁縫ちよびつとやったりね。機織り工場へ行ったりしてね。

### 仕事・お見合い

昔の工場ってね、今みたいに労働基準法なんてない。個人の工場に泊まり込みで行ったもんで、朝から晩まで働かされるじゃん。ほいでも、一年半くらい働いたかな。とてもヤダと思ってるね、父親に迎えに来てもらって、帰ってきちゃったじゃん。ほうして、家でまた裁縫習いかけてったら、大阪のいところから、仕事の手が欲しいで来ないかって手紙がきたもんで行ったの。肉屋をやっとしてね。二階はレストランで、食事を出したりとかね、帳場に座ったこともあるしね。ほいでも、そこもやんなっちゃって、京都の電気屋さん行ったの。京都は二年くらいおったかな。ほしたら父親が、見合いするで帰って来いって言うてね。



父・母と一緒に

昔は二十二歳にもなるとみんな結婚しちゃうじゃん。私やだなあと、どうせ嫁に行きゃあへんでいいわと思ってお見合いしたの。ほしたら、お父さんだったじゃん。四つ歳は上でね。顔もみたことない、ところも行ったことない人でね。お父さんの親戚が仲人みたいに取り持ってくれて、在所でお見合いしたの。私は何にも覚えてないけど、ほんのちょっと話したよ。あの頃、昭和三十年代は世の中悪い時じゃん。ほいで父親の言うことが、お父さん口がうまいもんで「あいつは頭が良さそうだで、食いつぶぐれがないで行け」っちゅうじゃん。私の父親って町の暮らしを知らんじゃん。名倉生まれの名倉育ちの坊ちゃんだもんで、「町に行くとお食えん」とか言っちゃって。私、嫌だと思っただけ一回お断りの手紙を書いただよ。そしたらずくに、そんな事言わんで来てくれって手紙が来たもんで。お父さん字がうまいしね、ほりゃあ頭は確かにいいだろうなと思って、一回のお見合いで、親の言うなり。電気屋さんを辞めて大多賀に来たじゃん。昔はそうだったじゃん。わたしんとう兄弟みなお見合いで、親の言う通りだよ。

## 大多賀での生活

大多賀に来たのは節分だった。それは覚えとる。今の上皇さんたちと同じ年に結婚したの（昭和三十四年）。来た時にテレビがなくてね。上皇さんたちの四月の結婚式を隣の家へ見に行つたよ。在所はたくさん田んぼや畑があつたけど、大多賀の家は、百姓だちちゅうことは聞いたけど、あらへんじゃん。ほして春になったら、遠くの山つきの向うに畑があるじゃん。名倉に比べて場が悪いもんで、びっくりしちゃうてね。田んぼは小さいし少ないし。ほいでも四、五反はあるもね。百姓に難儀したよ。

お父さんは六人兄弟で、私が嫁いできたときには一番上のお義姉さんは結婚しとって、その次の子は、私が来てから結婚した。三女はすぐ向かいに嫁いで、弟が豊田の山村屋って用品店にね、養子に行つて。一番下の妹は東郷へ行つとる。その子なんか、私が来てから小学一年生になったもんでね、みんながわたしんどうの子供かえ？なんつちって言うぐらいだった

もんね。

その頃は、うちに牛がおったよ。私の在所はあの頃、まあはい耕運機買ってあったけど、ここはまだ牛がおってね。私がある前から順三つちゅう知恵遅れの男の子がおってね。その子が牛の世話をして。お父さんの兄弟でもなんでもない。私より二つばか歳の上の子だけど、子供みたいなもんでね。私も草を刈ったり、一緒に百姓やったり。

お祖父さんお祖母さん（義父母）は、ほやあしやんとした人だったよ。とにかく、私は家庭の事何も知らんで来た。間に合わん嫁だと思われたじゃないの。ほんだもんで、親戚のおじさんに言われて、わたしんとうは隣の家で別に暮らしたの。大変だったんだよ。私には言わんかったけど、父親が噂を聞いたみたいで、私がいつ出てくるかと思つて、家から下の県道を眺めとつたつて、うちのお姉さんに言つたみたい。

私が来た年に伊勢湾台風があつたじゃんね。その時は、家は木の皮に石が載せてある昔の屋根。ほの屋根が全部飛んじやつてね。家の中で傘さしとるくらい。壁もみんな落ちちゃつたりね。川の水が増水して、すぐ側の橋が流れたり、田んぼには砂がのつてね、稲が砂に埋まつて難儀をしただよ。郡界橋（大多賀から三・五キロほどの国道一五三号に架かる橋）まで道がズスタズタになつてね、車が通れんかっただよ。うちのお父さんとうは、消防団で川やなんに流れちゃつた人を探しに行った。伊勢湾台風酷かったよ。ほいだもん大体家の骨組みは昔のまんまだけどね、屋根替えたりね。私が来てから、建具やなんかみんな入れたよ。お父さんがみな大工に頼んでね。昔の古い家だったもんで。サッシも全部変えたよ。

### 出産・子供たちの寮生活

三十歳前に、子供は三人産んだよ。それこそね、上皇さんたちと同じ年に結婚して、ほいで今の天皇陛下が二月、うちの長男が三月で一ヶ月も違わんで産まれとるの。私かね、子供を産むに在所へ行つとつたの。ほしたら仲人おじさんが来てね「やい、美智子さんも産んだで、お前も早よ産めよ」なんて言つてね。予定日を過ぎても産まれんかったの。ほしたら、長

男は三月七日。結婚した年もそうだけど、私が忘れとつても世間が言うじゃん、何年だとか何歳だとか。都合がいいよ。

ほの次の子は、一緒じゃないけどね。昭和三十八年に次の女の子が産まれて、昭和四十年に男の子が産まれた。みな在所で産んできたよ。昔はね、病院行って産むなんちゆう人少なかったじゃん。でも私は、長男の時難産でね、三日も腹が痛くても産まれんでね。名倉に岡田医院つちゆつて、まあないけど入院もできるところだったもんで、そこで長男とほいから娘と二人産んだ。三人目はね、腹が痛くなったでつて、兄さんが医者に行つてくれたら日曜でおらんちゆつて。仕方がなくて在所の家で産んだよ。お産婆さんが来てくれてね、お風呂入れるのもちゃんと来てくれるしね。病院で産んでも産婆さんとお医者さんと二人でやつてくれた。

うちの子んとうは、小学校はすぐそこにあつた大多賀小学校を出て、中学は足助の寮へ入つた。今の交流館の辺ね。あそこら辺に足助病院があつて、それが寮になつて。週末、土曜に帰つてきて月曜の朝にまた送つていくつちゆうね。なかなか大変なのよ。でもないかと寂しかったよ。ほいだで、帰つてくると嬉しくて夜明けまでしゃべっちゃあね。長男がアキレス腱切れて、家に連れて来れんくつて、寮で寝とつたことがあるけどね、寒くて寒くて。それで、あんな寒いとこに子供預けてつて、PTAの会長に怒つてやつたことがある。泣いて困つて親が行く家やら、色々あつたわ。うちの子んとうが卒業してからスクールバスが来るようになったもんで、可哀相に六年生までしか家におらへんかった。

### 子供をひとねんならん

お嫁に来たけど、仕事には行かせてくれたよ。お父さんだつて、山仕事や炭焼きとか、ちゃんとしたお金が入つてこんだら。ほやあ、子供三人ひとねん一人前にしないよならんし、お金取りには行かせてくれた。

方々の仕事へ行つたよ。今で言うアルバイトだね。家の仕事も回しといちゃあ、土方も行つたし、足助の役場のパートにも行つたよ。あと、いこいの村のパートにね。

土方の仕事は昔だもんで鋤簾じよれん持ったり、旗振ったり色々。毎日じゃない、たまーに行くだけだけどね。家の仕事の暇ができたら行くだけでも、土方のお連れさんみんな怒ったよ。「佐久子さんなんか、雨降りか雪の降る日にしか来れへんじゃないか」ってね。ほんだけど私をちいとも使ってくれたもんでね。

お父さんの百姓の手伝いもしたね。昔は養蚕が収入の第一だったみたい。私が来てからは向かいにお嫁に行った子が飼ったけど、一年くらいで手もないし辞めちゃったね。だもんで、炭焼きでね。一緒に山行って、木を寄せたりね。炭を焼いて、植林して下刈りして。

そのうち森林組合の労務班つちゅうのがあつてね。わたしんとう夫婦と向かいの妹夫婦四人でね、森林組合の山で仕事したこともあるんだよ。ほうしたら、いこいの村ができたもんで。

### いこいの村愛知

いこいの村は泊まるとこだけじゃなくて、パターゴルフやテニスやったりね、凄く広いんだよ。建物も立派でね「名古屋でも、こんだけの建物はなかなかないよ」って建築する人が言っとつたよ。昭和五十三年当時だもん。過疎化対策つちゅうことで「女の人みんなが働くところをつくるだ」ってお父さんが発起人の一人で、一生懸命になつてきたでね。場所の買収から始めたもんで、できるまでが大変だったんだよ。足助の東部つちゅうかね、三部落、明川あすがわ・連谷れんだに・大多賀の女の人の働き場としてね。だけでもつと方々からみえたよ。大多賀のほとんどの女の人が働きに行つた。みんな働いとると、部落も活気があつたね。

私は四十歳くらいの時じゃないかな。メイドさんね。昔で言えば女中さんだけど、ホ



いこいの村愛知のみんなと

テルだもんね。トイレから部屋から掃除して、ご飯出して布団敷くまで。料理は板前さんがおられるもんでね、わたしとうは運んだり、皿洗ったり盛り付け手伝ったりしたね。お客さんの対応もサービス業は大阪でやとつたで、別に大変なこととはなかったよ。でも、一生懸命働いたんだわ。

お父さんは社員だったもんで研修行ったりしたけど、わたしとうパートは研修なんもいかへんもんね。ただ熱川あながわハイツ（静岡）から人が来てくれて、接客のこととか教えてくれたよ。支配人は二年ずつくらいでくるくる変わるもんで、お父さんは支配人会議によく方々へ行つたんだよ。ほいだもんで、私は百姓が大変だったけどね、いこいの村が閉まるまで（平成十三年）パートに行つとつたよ。

※いこいの村愛知……足助の東部、伊勢神地区にオープン。県営の宿泊施設で、バーベキューハウスやテニスコートを備え、夏休みや秋の紅葉シーズンには多くの観光客が訪れた。（参考文献…足助物語―昭和30年の合併から50年 発行日…

二〇〇五年三月 発行…足助町）

## 趣味のお琴

琴は五十五歳の時からやってたよ。新聞の広告にね、お琴習いませんかって出とつたもんで、それまで音楽なんてやったことなかったけど、ほの年でもやれるかなあとと思って電話したら「やれますよ。おいでん」って言うてくれたもんでね。ほいで十年くらい、足助の公民館（現…交流館）で習った。お父さんが病氣して、夜稽古でやれんもんで辞めちゃったじゃん。最後に演奏会をやつたのが、豊田の参合館にある能楽堂の舞台でね。東京から先生の先生を呼んでね。演奏会って言うたって、お金を出してやらしてもらうだもんね、わたしとう。入場者にも切符を売ってね。演奏会するとお金がかかるんだよ。で



お琴の演奏会

もいい思い出だわ。ああいう事は続けていかんとやれなくなっちゃう。毎日やらんと、やれんね。歳くつたら持ち運びも大変だしね。でも私、道具を全部娘にやったら、習つとるみたいだわ。

### お父さんの病気 仕事が趣味

お父さんは、七十そこそこで脳内出血やってから左半身が悪くなったじゃんね。いいこの村定年して、嘱託で五年やって、それも辞めて、これから方々二人で旅行に行けるかなと思つとつたら病気になっちゃったじゃん。ほいだもんで「つまらん」って言うけどしょうがないね。ここにおりゃあ、口達者だもんで誰か来れば話ができるんだけど。お父さん趣味がないじゃん。なんかないので聞いても「俺は仕事に興味だ」つちゅうくらいだもんね。お祖父さんとお祖母さんは、体が弱かったもんで、お父さんは子供の頃から難儀したんだよ。人の倍ぐらいよう働くんだった。山仕事でもなんでもね。仕事ばつかやつとつたもんで、お父さんが写つてる写真も全然ないんだよ。

お父さんが病気してから、二十年くらい。長いこと家で看とつたけど、私も歳いっちゃって看れんだ。全然動けんだもんね。何度か面倒みとるときに、私も倒れて、子供や隣部落のお姉さんが面倒みてくれたんだけど。二人して倒れちゃうのを子供たちも心配せるじゃん。ほれで預けてもらったの。入れてもらえて有り難かったわ。



貴重な家族写真

## 大多賀の昔と今

大多賀来て六十年ちゆうと随分変わったよ。家の前の山もてっぺんまで畑だったんだよ。今は木がみんなひととなっちゃって、だんだん空がみえんくなつて。私が来てから木を植えただよ。

昔の道はまだ舗装されてなくて、石ガラの道だったもんね。当時は歩いちゃあ郡界橋行ったりね。在所に帰る時は、郡界橋まで歩いてバスに乗って。行っちゃあ来るとね、桐の下駄が駄目になるくらい、道が石でガラガラでね。昔は革靴なん履きやあへんじゃん、着物着て歩いて行くだもんで。車の免許は三十代か四十代の時に取りに行ったかな。昔は大多賀にも店があったの。だから、生活には困らんかったよ。子供に頼めば買いに行ってくれたし。

雪が降って大変な年はね、雪で出ていけんもんで、二、三軒奥の旦那さんが亡くなったんだけど、みな葬式にいけんじゃったよ。そんだけいっぱい降った年もある。

お祭りも盛大にやったけどね。春祭りと秋祭りとあつてね、本祭りは九月だったと思う。わたしんこのこの裏が、神社。もう一とこあつて、一緒の日にお祭りはやるの。幟が出たり、団子やったり甘酒沸かして屋台も出たんだよ。わたしんこの、よう神官さんの宿だつてね。宿って言っても泊まりやへん。昔は宿で、着替えたりお昼食べたりの、お風呂入ったりしたの。わたしんこの来れば、ご馳走つくって出しただよ。今は人が少なくなっちゃって、段々省いちゃつてね。ほんと世の中変わって味気なくなっちゃった。

ほのかわり、水道だとかトイレだとか、みな水洗に変わっていいじゃない。昔はトイレも古かったし、水道もありやへんなんだしね。水は掘り井戸から、鉄管で取っちゃ溜めて使っちゃあおつた。トイレは汲み取りしては、畑に持って行って肥にして



裏の神社で長男と  
立派な門松は部落で作った

ね。お父さんが病気になる前に水洗トイレにしたんだよ。お風呂は、私が来た当時は薪で焚いておったけど、早よからガス風呂にした。だもんでとっても楽。料理も早いうちからプロパンだけど、昔はおくど焚いてね。山からモヤ拾ってきてね。モヤは炭焼きしとったもんで、木のウラを細い先のとこね、縛って持ってきたあね。炭焼きの山なんか、近いとこにそうありやへんも、遠いよ。だけど私は子供連れちゃあおんでつたりね。長男なんかよう山へ連れてつた。田んぼでも畑でもね、みな連れてつたよ、私。

こたつは今でも炭こたつ。火を切らさんようにしてね、時々炭を足してやる。匂いがせるもんで豆炭じゃないよ。昔はこの灰を田んぼやなんへやると草も生えんでいいって聞いたもんでね。炭は山谷やまがの筒井さん（第五集掲載）から。お父さんがね「筒井さんの炭しかあかん」ちゅつてね。

今は生まれる子が少ないじゃん。大多賀でも高校生か中学生か覚えがないけどね、今は一人。一人しかおらんもんね、寂しいよ。小学校があった時は、子供の声もあつて、先生も毎日おいでるしね、賑やかだった。運動会だつて盛大にやつたしね。結構人数はあつたの。廃校になつてもう何十年（昭和六十二年明和小学校に統合）。今はたまり屋さんが、大きな樽を置いて作つとる。六月にイベントをお昼にかけてやつて、部落の人も招待してくれるの。学校がなくなつてしまつたのは悲しいけど、そうやつて使ってくれるのは有り難いよ。

それとね、去年から田んぼを全部みんな止めちゃつた。うちが止めて、五年か六年になるけどね。みんな歳行つちやつてね、やれなくなつちやつたの。息子さんや、娘さんたちも、一緒に住まないと、やるのは難しいよね。

私が来てから、あの頃元気だつた年寄りの人は、ほとんど亡くなつちやつたね。みんないない人だつたね。大多賀に友達みたいな人はおらんけどね、年寄りの人んとう



隣のお家で五平餅会

がみんな大事にしてくれて、嬉しかったね。陰になって「おまん頑張らっせや」っちゅって親切にしてくれたもんで、私も我慢しちゃった。子供を置いて出ていかんで良かったなって思うだけ。辛抱したもんね。

大多賀は静かだから一人だと寂しいよ。食べるか飲むか、新聞見るかテレビ見るかだもんね。でもお姉さんや妹に時々会うじゃん。ほうすると姉妹みんな八十の余で長生きだもんで、姉さんが金さん、私が銀さん、妹が銅さん、その下の子が銅さんだか錫さんだかって言っておるの。今は百までっちゅうじゃん。一生懸命身体のこととは気を付けとるもんで、元氣にあればいいよ。ようこんな生きて丈夫におれると思っつてね。感謝だね。

【聞き手・浦野友理（大平町）】

取材期間…令和元年六月～令和三年二月

# 日本は神の国・男子は神の子という教育だった



ほんどう しょういち  
本藤 銚一さん (国谷町)

昭和八年六月二十九日生まれ(八十七歳)

盛岡村大字上国谷(現在の豊田市国谷町)生まれ。父は昭和二十年六月六日にグアム島で戦死。中学二年生から部落のお役に出た。中学卒業後は農業に従事したが、農業の斜陽化により三十八歳からトヨタ自動車の保安課に勤めた。

豊田市戦没者遺族連合会理事、足助地区遺族会会長、平和を語り継ぐ事業実行委員会委員長を務めて50。

## 生まれたときは盛岡村

本藤銚一と言います。昭和八年生まれです。八十七歳になります。ここは盛岡村ちゅつたんです。生まれたときは盛岡村大字上国谷かみたにや。昭和三十年の町村合併で足助町になったが、足助の中でも西部地区って言って豊田(市街)寄りです。ほいだからトヨタ(自動車)でも通勤せればできる。平成十七年に豊田市に合併してからは、豊田市国谷町くにや。

ワシは朝五時に起きます。前は四時に起きとった。今も田んぼや畑をやっておるでね。まごころ市場(豊田市則定町にある産直市場)に出すための畑があるし、健康のためには体を使わないかん。大根や白菜を出いとる。毎朝出いとるよ。

田舎だで隣の畑や田んぼもあるし、荒らすわけにはいかん。どっちみち草を刈らにやいかんで、みんなといっしょに草を刈って、いろんなものを作とる。健康のために、とにかくい動かいないといけないかん。ほういうことをやるこが自然に筋力を

作って健康になれる。今ぐらいの時期（九月末）だったら、大根の手入れをするとか、稲がのうなったむんで、まあいっぺんぐる（田んぼの周り）を刈って、田んぼは打ってよしにせる。今はコンバイン（稲を刈り取りながら脱穀する農業機械）で稲を刈るで、藁を皆田んぼに残しておくむんで打っちゃわにゃいかんでね（コンバインで裁断した藁を土中にすき込む）。

### 父は昭和二十年六月六日にグアム島で戦死

ワシが子どもの頃は戦時中だった。今はアメリカの悪言<sup>わる</sup>つっちゃあいかんかもしれんけども、アメリカは赤鬼、イギリスは青鬼。ほんなものは本土に絶対入れちゃあいかん。とにかく竹槍で一人殺さんうちは絶対に死なんと小学校六年生の時分でもそれを信じて一所懸命で体を鍛えた。

お父つつあんは、大正二年生まれ。職業軍人じゃないけども、甲種合格（徴兵検査の身体検査で、健康で最も兵役に適していると判定され第一級で合格すること）だった。あの時分は甲種合格で天皇に尽くせるということは幸せだと信じられとった。兵隊さんちゆうことは神である天皇に仕えるだむんだい甲種合格になるなんちゃ、今の東大のトップぐらいの価値があっただよ。

お袋は十六歳でござって、十八歳のときにワシが生まれた。昭和八年に生まれたけ



東南アジア海域を回った航路



父の写真と経歴を記した額

れども、その年にお父つつあんは第一回の招集で行っちゃって、一回り東南アジア海域を回って昭和十年に帰って来た。ほいで妹ができて、次の男の子ができた途端に、昭和十五年の春には第二回の招集で行っちゃってね。昭和二十年の六月六日にグアム島で戦死。上海におっただけどサイパンが危ないちゆうことで、みんなグアムに送られて死んじゃっただわ。まだ運が良くて、船がグアムへ着いたけんね。遅くから行った人は着かんで皆沈められちゃっただ。

ほいで、お袋は、お父つつあんと三年と三月しか暮らさんかった。たまたま、ほういう間があつたから兄弟三人できたけども、兵

隊さんというのは、国のために命を捧げるって言って戦争に出て行きやあ何にもややあへなんだむん。母親の苦労と言つたら、一人で三人の子どもを食わして行くなんちゆうことは、到底できることじゃない。女手一つで三人の子どもを育てるだけでも大変だけでも、近所付き合いかから親戚付き合いか、畑仕事もやらにやいかんし、いろいろなことを全部やらにやいかん。あの当時の母親なんちゅやあ、神であり仏である。お国のためにいかに尽いたか、天皇陛下でも見してやりたいぐらいだよ。

### 男子は天皇に仕える神の子

「男の子は、天皇陛下に仕えるで丈夫ない子じゃなけにやいかん。絶対に傷をつけたりそそうしちやいかん」ということで、お袋はえらい神経を使われとつた。ワシも「天皇にお仕えせにやいかん。神の子だで」ちゆうふうに着ちやったじゃんね。今の母親は、ほんなことを言つて育てる人はおらんよ。

女の子は丈夫な子どもを産むようにせにやいかんということで一所懸命にやられた。お袋がほれに徹して尽くしたから、



生まれた頃の家族写真

ワシんとうはこうやって健康でおれる。感謝だよ。お袋は「お前はこれから、このうちを守っていきやあ、山や田んぼがお前のもんになるだけでも、弟や妹は出てかにかいやいかんだで、この子たちをしつかり親に代わって面倒見ろ」ということだったむんでね。妹弟きょうだいのことを親代わりぐらいのつもりで一所懸命で見とるけども、まんだ、いまだにみんな健康です。

### 中学二年生から部落のお役に出た

中学卒業して百姓をやったころは弟や妹は歳が小さいで、まんだ、何にもやれやへんでね。ほんなんにいろいろ言つとつちやいかんむんだい、母親の後をついて、いろんなことをやりました。

部落のお役があの時分には大変あつて、「中学になったらお前が出よ」ちゅうことになった。ほいだで、中学の二年生からずつとお役に出とる。道路が悪いで、道路修理が多かった。地域地域の人たちの人がたあは、みんな動いただよ。道路が無いむんだい、せばい道をくわ鋤でつついちゃ直して生活した。今は市道になったで、舗装もできていい道になったけども、昔しゃあ、ほんなむなあ車どこじゃなくて、人間が通れんような道ばつかった。ちよつと悪いと「あつこやらにかいやかんぞ」ちゅつてお役が回つて来る。鋤を持つてつて、みんなして道を作つて、お互いに歩いた。ワシも体がよかつたむんだい、中学になや、同しにはできなんだけど、とにかく一日みんなといっしょにやれたでね。部落の付き合いちゅうことは、ほういうことが大変だったです。

### 農地改革で田んぼを取られたが近所の人々が返してくれた

うちは、山や田んぼが、たあへんたくさんあつて、貸いておつたむんで小作が入つてくるしね。山は炭を焼いたり、割り木を割つたりせるむんだい、経済的にはどうちことなかつた。田んぼが無い人に貸いたげると、小作は作り分けちゅうぐらいで、米でも六俵取れると半分の三俵くれよつた。炭を焼いても半分はくれよつた。

昭和二十年までは、ほうゆうことでやれたわけ。戦争に負けて、昭和二十二年に社会党が天下を取って農地改革をやったむんだい、田んぼは、皆取られちゃった。近所の人が「皆もらっちゃいかんで、半分かやいてあげらあ」って言ってくれたむんだい、田んぼや畑がうちで食うぐらひは残った。近所の人の思いやりでやれただ。

### 妻とは二十歳のときに結婚

二十歳のときに結婚した。長い付き合いだ。結婚して、はい六十五年暮らいとる。中学の同級生だむんで同い年だけんね、おばあさん妻も八十七歳だむん。まんだ、ああやって、丈夫いだ。見合いもへちまもなく、恋愛もしたかせんか覚えがないが、いっしょにやろめえかちゆうことになっていっしょにおる。

ワシは初めて冷田（豊田市冷田町）に行つて見たときに、こんない子がおつたらいいなと思つてね。この子なら絶対いい子を産んでくれると信じた。ほの子が、いっしょになってやるぞつて言うむんだい。おばあさんも丈夫いし、ワシも丈夫いし世話ないだよ。おばあさんのおかげでおれるだ。みんな丈夫いでね。ありがたい。

今だに二人とも健康で、子どもは二人あつて、二人の子どもが三人ずつ子どもを作つて、六人になる。ほの子が今、みんな、ひこひ孫を作つて、十一人おるよ。ずっと、みんな健康です。子どもは女ばつかだつたで結婚が早いじゃんね。ひこも早いやつは、はい中学の二年生。ワシより大きいよ。

子どもがなげにゃあ、ほのうちは絶えちゃう。ほの家系が終わっちゃうわけだ。年寄りなん、いつまでも生きるわけじゃない。子どもを作らんなんちゆうとろいことをやとつたじゃあ、国の将来を考えると自然消滅だよ。誰が考えたつて分かるじゃ



笑顔のご夫婦を撮影

ん。人生なんていうものは、千年も万年も生きれるわけじゃないし、子どもがおらんなんちゅう、情けない国は、世界で日本だけだよ。まっと、がんばらにゃいかん。

### 農は国なりという時代だった

食べる物は田舎だから、ちいと手入れすりゃあ自然にできるむんで、食べるにゃ事欠かなんだ。うまいもんは食わなんだけども、食べるだけは食べれたね。お父つつあんは、戦争に行っちゃうもんで、田んぼや畑がやれんかったけども、たまたま、うちが本家で、隣のが新家だったで手伝ってくれたでよかった。仕事見とっちゃあ、ちよいちよいと合間合間にやってくれたむんだいできたわ。

昔は、農は国なりちゅうぐらいの時代だった。米は命の次に大切なもんだったでね。農業は（土が）肥えておるで何でも生産ができるし、田んぼを作っても、この辺は、ほかっておいても一反で七俵、八俵取れた。山の木は<sup>成長する</sup>どんどんしとなるし、それが売れるしね。ほいだで一年の収入は余っちゃいよった。暮らすにゃあ何の問題もなかったです。

### 竹皮は肉と同じ単価で売れた

竹皮は、肉を包んじゃあ売り出すのに使われた。肉の目方の値で売れたで、竹皮も良かったよ。真竹の竹皮。うちでも多い時にゃあ、八月に百貫目（三百七十五キログラム）ぐらい取れただむんだい。ほいだけ売れやあ百貫目の肉が食えたで、楽だっただよ。竹皮を拾ったり筍を売ったり、藪でいるんなことができたわ。いい時代だっただよ。

竹皮も買いに来てくれるだった。竹皮は天気が良きゃあ、三日か四日で乾いちゃうだ。薄いでガリガリになっちゃう。さげれるぐらいを一束にして縛っておきゃあ、買ってつてくれたじゃん。

## 自給自足の生活

今と違って、田んぼでもまず株切り（稲の株を細かく切る）ちゅうことをやって、畦あぜを塗って、手で打って、ならいて、草を刈って、代しろを切って（代掻きをして）って、とにかく、手入れせにや田んぼになりやへんだむんで手作業で全部やる。田んぼだちゅっても、麦も作らにやいかんむんで、二毛作で一所懸命がんばっただわ。稲を作って、麦を作る。一年を通して、ずっとやっておった。

近所の衆は、男の人がおったでやれたけど、うちは母子だでやれん。ほいだけでも、ほれを一所懸命やったじゃん。今んなや、おかげで健康でおれると思や感謝せにやいかんだ。人間は鍛えにやあかん。やらにやあかんです。

自給自足だから、綿を作って糸を紡いで反物を織って、それを着とった。金はいらなんだです。機織りは、おばあさんが織とった。売るなんちゅうことはできんむんだい、あげたり、むらつたりで交換して、いろんなことができた。ナスがたあへん採れやあ、あげときゃあ、今度は「瓜うりが、おらがうちにはえたくらいことあるでどうだ」ってくれよった。ほういうことで生活ができた。

炭焼きもやったよ。割り木も割ったよ。今は売れんけど、昔はほういうむんが売れたでね。炭は、大人になつて焼けるようになった。炭窯は作ってもらった。炭焼きちゅうと難しい。無性に焚たいただけじゃあかん。割り木でも炭でも、ほの当時は業者があつたむんだい、みんな買ええ来てくれるで世話なかつただわ。昔は、ほういう業者が多かつただよ。今は自動車で自由に出入りできるけども、当時はこんなところやなん、道道が無いので、車やなん来れへんだむん、歩歩くたよ。

味噌も醤油も作るし、豊田（市街）に行くにも自転車じゃなきや行けなんだけど、ほんなに行かんでも、自給自足でみんな生活ができただよ。自然環境はいいし、こんないいところは日本でも数が少ないですよ。どえらい良かった。ほれがだんだんと農が斜陽化になって、さっぱりあかんようになった。時代の変化です。

### 三十八歳からトヨタ自動車の保安課に勤めた

昭和三十年ぐらいから工業主体になってきたので、三十八歳からトヨタ自動車に勤めました。トヨタ自動車ちゅうところはいいところで、百姓はそのままやらにゃいかんということだった。

ワシは保安課だったで、二十四時間勤務だけでも一日おきに行きやあよかつた。年休があるし、月に十二日行きやあよかつたじゃんね。会社ちゃあ、いいとこだなあと思つてね。時間が来たたら門を開けときさえすりゃあ、従業員は自由に入りますで、何にもやることはない。寝とつてもいいだ。うちへ行って一所懸命に仕事をやると、会社行ってよう寝れてよかつたなと思うぐらいだったよ。

ほいだけでも、会社ちゅうところは、やっぱり、みんなそれぞれに努力せにゃいかんむんだい、創意工夫とQC（Quality Control：品質管理）をやらにゃいかんかつたじゃんね。QCというのは、班に分かれて一つのテーマを持って、みんなして改善する。ほれが大変だっただよ。ワシのところは、やる奴がおらんで「ほれくらいのこと任しとけ」って言って、ワシがみんなやった。総務部ちゅうと管財課や文書課もあつて、八百人ぐらいおつたけども、ワシはトップだったで、見込みはよかつたよ。創意工夫でも、一つ書いて出すと最低で五百円、ちよつといいやつだと千円、二千元とくれる。五万や六万は毎月小遣いが入りよつた。上司も認めてくれてありがたかつた。ほいだで、重役まで覚えちゃつたでね。「本藤さんみたい

### 定年後は瀬戸の豊精密工業に行った

六十歳で定年だったけん、ほれから十五年間、瀬戸にある豊精密（豊精密工業株式会社）ゆたかつちゅう下請けに行つたわ。こはまたいいとこだで、何にもやることはない。重役は全部トヨタから行くだった。重役と言っても部長級が行くだったで、気安く話ができて世話のないとこだつた。あそこでも、時間が来たたら閉めて、時間が来たたら開けやあ、何にもやること

ない。百姓やって、会社へ行って寝とやよかっただわ。いいとこでやらせてもらってよかったな。

### 自分で切った木で家を建てた

ワシが会社へ行っておつて、終しまいの時分にマツクイムシが入つて松が枯れだいた。松を枯らかいちゃうと、家ができんぞと思つて、自分で木を切つて自分で出いて、製材屋へ持つて行って挽ひいといて、定年になつてから、平成七年に家を作つた。松がえらいことあつたむんでね。今は一週間もすりゃあ家を建てちゃうが、四年かかつて作つた。

柱でも普通は四寸だが、皆八寸（約二十四センチメートル）ある。天井板は八分板（厚さ二十四ミリメートルの板）で打つたるけんね。松でも赤身のジン



松の八分板の天井

（赤身の色の強い所は「ジン」と呼ばれ、透明感のある綺麗な色になる）になつたやつ。これだけの天井板はお寺へ行ってもまず無い。うちの木だでやつたけんね。

うちの上にあつた桜を切つて敷居にした。「桜の敷居やなん反りくつちやつてあかん」ちゆわれたが、挽いて一年乾かいたいたら狂やへなんだ。玄関は全部けやき樺だ。樺ちゆうやつは狂つちゃうだが、木が古いで狂わなんだ。この辺は道がないで、自動車が入らんむんだい、木を買ええ来てくれなんだ。ほいで山に古い木がたあへんあつただよ。

今じゃあ外材がいつくらでも入つて来て、いい木もあるけど、地じの木（地元の木）で作つておかんと、やつと持長持ちたない。場所が違つと木はあかんよになつちゃう。うちの山で、自分に切つて作つただで、屋根さえ漏らさにゃ千年でも持つよ。法事やいろんなことをやるとね、皆が集まるむんね。何事かちゆうと、うちは広いで、皆ここへ集まるで、ありがたいことだよ。

## 戦没者遺族連合会で『聞き書き』の本を作っておる

戦没者遺族連合会は、昭和二十二年にできただよ。まだ、盛岡村だった。昭和三十年に盛岡村、賀茂村、阿摺村、ほいから足助町と、四つがいつしよになって新しい足助町になった。足助全体で英霊の数が五八八名。今、遺族会に入っておる人はほとんど減って二百人あるかないかだ。

今は、豊田市戦没者遺族連合会の理事と、足助地区の遺族会会長をやつとる。歳の多い人が役をやらにゃいかんようなことを言つてやらせられちゃつて、代わりがないむんだい二十年足助の会長をやつとる。

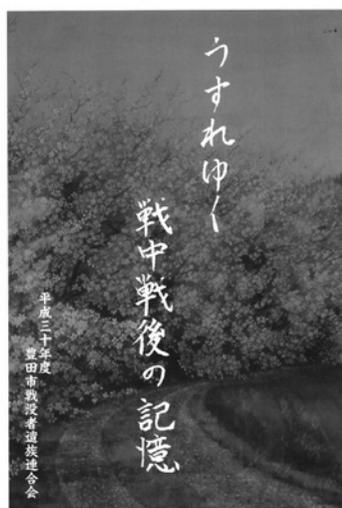
名古屋のピースあいち（戦争と平和の資料館）つていうところに、子どもたちを募集して連れて行くことを十年以上やつとる（戦没者遺族連合会の『平和を語り継ぐ事業』）。それが去年から、熱中症の心配があるでちゆうことになつて行けんくなつちやつただ。

遺族会の中で、「足助の聞き書き隊」に習つて、ワシがとうもやつちやあど「うだ」ちゆう話が出てきたじゃん。ほいで、足助交流館へみんなで行つて、あすけ聞き書き隊の講座で要領を得たむんでやつとるだよ。

平和を語り継ぐちゆうことで、実行委員八人で作つておるだけでも「足助で習つてやつたで、お前がやつてくれにゃあかん」でつて、ワシが実行委員



聞き書き講座の様子



聞き書き集『うすれゆく戦中戦後の記憶』

長をやつとる。ほいで、足助で第一回をやらあちゅうことで作った（平成三十一年三月に足助地区の戦没者遺族から話を聞いてまとめた聞き書き集『うすれゆく戦中戦後の記憶』を発刊）。三木さんは、いい記録になったよ（話し手の一人である国谷町の三木昭一さん（九十歳）が令和元年六月に他界）。あの時分にああ、小学校の高等科を出て志願して行かれただむんだいね（三木さんは志願により海軍に採用）。「どっちみち死ぬなら兵隊にならにああ損だ」ちゅうような気持ちもあつて、みんな志願しただよ。ほういう教育だった。攻めて行くちゅう考えばかり持つとったけんが、終いになあ攻めて行くどころじゃないむんね。ほいでもほの気持ちがあつて、みんな出て行っただで。

### 戦没者遺族会で愛知縣護國神社に奉納した茅の輪と門松がギネスブックに認定

足助の遺族会ちや有名だよ。護國神社へ奉納した茅の輪（茅で作られた大きな輪）と門松をギネスに載しただでね（平成二十一年、愛知縣護國神社に奉納した直径十一メートルの茅の輪と、高さ十五・六メートルの門松がギネスブックに認定）。ギネスの認定書やら、いろいろあるでね。ギネスちやあ日本一じゃないだぞ、世界一。ギネスに載せるちゅうと、金がかかるじゃんね。東京から担当者を呼ぶと、一人に十五万円いる。二人頼むと三十万円もいる。えらい金があるだよ。

ワシは森林組合の関係で前からよう知っておるけんが、竹ちゅうと日本の一番はこらだでね。大楠（豊田市石楠町）から白鷺温泉（豊田市籠林町）の辺まで日本一の竹の産地だ。護國神社の宮司がとにかく日本一にせにやいかんちゅう気持ちがあつて「ほんな良い竹があるなら、切れ切れ」ちゅうむんだい。

門松にしても六本そろえて切るちゅうことは、藪をそれなりに回らにやいかんし、出すがえらいことだわ。全部、田振（豊田市田振町）にある竹。ほやあ、太くて凄いに。孟宗竹だけど、普通は皆曲がついていつちやう。堅木ちゅう雑木だけでも、あれがしとなつちやつとるで、ほの間を真つすぐビューつと伸びて、上へ行って枝が出る。ほれまでは曲がやあへんむんね。ほんな竹は下地じゃできんわ。

田振ちゅうとは（傾斜が）急なところで、竹を真つすぐ出さには出せんようになってちやう。とにかく長いで、ほれを名古屋へ持つて行くちゅううことができんじゃん。警察に言ったら「そんなんが、持つてけるわけがない」ちゅうだもんで。「ほいじゃあ知事に頼んでおくれん」ちゅうたら「いっくら知事でもほんな馬鹿なことが通るわけがないわ」ちゅうわれた。「朝早う無性に行くぞ」ちゅう話をしたら、「ほやあ行つてください」ちゅうわれたむんだい、ほいで、毎年毎年行くようになってちやう。トラックの前と後ろへ竹を出して、プラプらぶら下げちやあ行くだったやんね。警察が見やあ分かるけども「暮れにやあ、また足助のやつが竹を持つて行くが、あんなん止めちやあいかんぞ」ちゅううことになつたと思つよ。

門松やなんは何年もやつただで、みんなしてやるだけん、ようやつたよ。大きい門松を立てるときにや、下はアスファルトだで、ほじくつてやるわけにや行きやあへんむんだい、土嚢袋が四百袋、ダンプに一杯いるよ。護國神社に見る人が「おまんた、五、六十万（円）むらつとるかん」ちゅうられるが「馬鹿言うなん」ちゅうつとるだけんね。ほんな太い竹は、山から出して支度をするだけでもえらいけん、ワシんとうは歳をくつたで、まああんなやれんわ。

## 日本は神の国という教育だった

ワシが子どもの頃の教育と今の教育とは全然違ふ。日本は神の国で、天照大御神あまてらすおみかみから二千六百年で百二十代続いた天皇ちゅうことは世界で日本しかなかった。ほれに誇りを持つて、神である天皇の言うことは何でも聞かにはいかんちゅううことだった。日本は経済的に狭いむんだい、韓国とか中国とかへ伸びて行きだいて、しまいにやあ戦争になつちやうた。天皇を生き神さんちゅうだったむんで、天皇の命令なんちやあ、こんな名誉なことはないちゅうぐらいの勢いで、戦争でもみんな行つただむんね。

日本はアジアを一つにせにやいかんなんちゅう大きな考えを持ち出すようになって、だんだんとやりだいて行くうちに、大東亜戦争（太平洋戦争…昭和十六年～昭和二十年）になつちやうた。天皇じゃなくて、軍部に力を付け過ぎちやうた。

あの時分の軍事力っちゃあ、日本は世界一を持つとつただが、ほれがまずかった。「日本は神の国で絶対に負けん」ちゅう一方的な教育で、「飛行機で爆撃なんせやがやあ奴は、鬼か蛇のような奴だで、帰りにやあ神風かみかぜが吹いて海に皆落ちちやうげな」なんちゅう話をワシがとうでも信じとつた。

最後まで戦うちゅう勢いでやっただけど、結果的にはあかんわけだな。ほいだが、負けてよかっただよ。勝ったら日本人、まっと困っちゃいよつたよ。こやあ、歴史の一つだけん、これからは、絶対戦争をしちやあいかんことは決まっとる。自分ひとりじゃ生きれんでね。仲間を作つて輪を広げて、日本だけじゃあかんだもんで、世界を一つにみんな仲良うやつて、力を合わせて進んで行く。自分勝手に生きていくと、人間、欲が出てきて喧嘩せにゃいかんようになる。欲が強くなつていくと戦争が起きる元だわ。自分さえ良けりゃいいでやつちやあ絶対にいかん。人間調子に乗つちやあいかん。戦争は絶対に繰り返えさん。

【聞き手・野田侑希（太田町） 高木伸泰（則定町）】

取材期間…平成三十年九月～令和二年九月

# パレット前史 〜シベリア抑留者は生き延びて町唯一のスーパーマーケットを築いた〜



村上 鐘一さん (足助町)

大正十二年六月二十二日生まれ (九十七歳)

山ケ谷で生まれ育つ。太平洋戦争に出兵し、シベリア抑留を体験する。帰国後、パレットの前身の八百己の経営に粉骨砕身する。多美子さんと共に、地域に愛され、地域に欠かせない店を築いた。

村上多美子さん (足助町)

大正十四年三月二十九日生まれ (九十五歳)

八百己の創業者の家系に生まれる。戦前をくぐりぬけ、鐘一さんと結婚。賢明に店を切り盛りし、鐘一さんと共に、八百己の歴史を繋いだ。

## 歌う村上少年 山ケ谷の豊かな自然のなかで育つ

村上鐘一です。大正十二年六月二十二日生まれ九十七歳です。兄弟は八人ぐらいおったけど二人亡くなって六人だけで、兄弟では一番下。生まれも育ちも足助で山ケ谷(今の山谷町)。足助城をずっと上がって行ったところを山ケ谷つちゆう。本家があつて別れた家で、あまり綺麗な家じゃなかった。でも周りが田んぼで自然は豊かだった。

小学校は椿立。自分は体がちっちゃかったもんでよくいじめられた。椿立小学校に六年通って、卒業して高等科の足助中

学校へ、二年ばかり来ました。中学校のことを高等科と言った。椿立小学校は、学級は、十二人ぐらいだったけどね。全校は六十人ぐらい。高等科は、八十人ぐらいおった。歌が好きだった。今でも歌は好き、カラオケとかね。昔の兵隊に行った時の歌とかね。

### 戦争の到来と徴用 軍需工場で毎日空襲にあう

高等科を卒業して、兄さんのところに奉公に行った。(兄さんのところでは)メリアス、肌着を作っていた。工場と店がくっついていて。一生懸命働いた。

徴兵検査に受かったもんで、豊川の海軍工場に行っただわね。海軍工場とは軍需工場だった、太平洋戦争になって。豊川の海軍工場では二五ミリちゅう機関銃の弾をつくった。海軍工場では寮に入っとった。空襲があつて警報もしょつちゅう鳴った。空襲にあったことがある。軍需工場だからよく狙われた。ほとんど毎日空襲にあった。警報が鳴ると、そのころは防空壕つちゅうのがあつてねえ。

### 機雷に撃ち落とされ玄山に上陸 怪我を免れた者は壊れた船で日本に帰った

十七か、八の時、豊川の海軍工場で兵隊検査を受けて甲種合格になったもんで呉の海兵团へ行ったねえ。そこで海防艦かいぼうかんに乗った。海防艦っていうのは小さい船で、敵の潜水艦を探知する、そういう仕事だったねえ。干弾かいじゅうという船に乗った。豊川の海軍工場の仲間も一緒だった。干弾には八人ぐらい乗っていた。北朝鮮の玄山げんざんに行った。海防艦が機雷に引っかけた。満州に上陸しちゃった。緊急用のボートに乗って陸にたどり着いた。五十人ぐらい乗っていた、二時間ぐらいボートに乗っていた。撃ち落とされて、朝鮮の玄山にたどりついた。日本から満州に向かう途中機雷に撃ち落とされて玄山に、傷ついたも



鐘一さんの父母 (当時 兼吉 76 歳 かね 75 歳)

のは泳げないから上陸し、怪我を免れた者は壊れた船で日本に帰った。

### ソ連兵に包囲される 陸軍と共に収容所に

私は足を打ったから上陸した。ソ連の兵隊に鉄砲を突きつけられた。陸軍と一緒になったら、不意打ちをされて取り囲まれた。玄山は街じゃなかったかなあ。玄山にいるとき、朝鮮は、南はアメリカ、北はソ連に別れた。今の韓国と北朝鮮。刑務所みたいな収容所に入った。玄山で船が機雷でやられたもんで、陸軍の兵舎と一緒に入っちゃった。玄山では炭鉱で働かされたり、建築をさせられた。労働に使われた。

虐待はなかった。捕まったつつか、収容所に入れられた。ソ連はわりあい貧乏な国だったから、食べるもんが少なかったから、百姓やって、自給の生活をさせられた。日本政府が収容所に入るように決めただがなあ。怪我してもわりあい軽いもんはシベリア連れて行かれた。玄山では食べるもんが少なかったもんで、農耕をやった。栄養失調になったもんがあるよ。

### 玄山での強制労働の様子 食べ物貴重だった

炭鉱では夜に働いた。昼は畑<sup>はた</sup>仕事をしていた。人参とか。食べ物は少なかった。地下に潜って、石炭を掘ってねえ、貨車に積んで、そんでソ連の人が巻き上げてくれるもんでねえ、ほういう作業だった。重労働だったね。太平洋戦争末期かな。炭鉱では夜入って、それで朝帰ってきた。昼間は収容所に帰って寝とる。十人ぐらい一組でやったかねえ。石炭を掘ってねえ、ほいで、石炭と一緒にトロッコで地上に上がる。地下に入ってねえ、石炭が、地球の波になっっているっていうのか、石炭が地球の中にある。炭鉱は地下一〇〇メートルくらい。夜は、まあ、日が暮れるちよつと前に炭鉱に入るもんでねえ、まあ、六時頃かねえ。スコップで、石炭を箱に入れてねえ。それで引つ張り上げる。ソ連の人が外の人が巻き上げてくれる。

割合おとなしかった、ソ連はねえ。収容所では陸軍も海軍も一緒だった。海軍と陸軍で五十人くらいかなあ。陸軍が日本のトップだった、すぐ殴った。ソ連は共産主義だもんでねえ。体の弱いものは玄山で亡くなった人いるねえ。トロツコに挟まれたり、土が落ちてきたり、事故で。事故の数も多かった。地下が凍っているもんでねえ、なかなか掘れんもんだで土をちよつとかぶせるぐらいで終わっただねえ。自由は全然なかった。ソ連の門があつて、逃亡するのを監視していた。逃亡しようとするものもいた。逃亡しようとする撃たれちゃうでねえ。鉄砲がないから戦闘を企てることもできなかった。日本人にロシア語ができる人がいたから通訳や交渉をした。ソ連兵は人数は少なかった。ソ連兵は五、六人。夜は炭鉱から石炭を抱えてきて。ほいであの収容所の寮ですごしたんだがお。朝鮮で一ヶ月。

### 嘘をつかれ、ソビエトへ 日本に帰国できると

内地に帰るぞと言われて、船に乗せてもらったけど内地に帰らんで、ソ連のシベリアの方に連れて行かれた。ナホトカへ。陸軍と一緒になつて、全員連れて行かれた。一〇〇人ぐらいだったかなあ。寒かった。寒かったもんでねえ、炭鉱の中に入ると温かくつて、炭鉱の石炭を掘る仕事をし、冬は炭鉱へ行つて、地下の一〇〇メートルぐらい行つたかな、ほいで、石炭を掘つて、石炭を掘つて、ほういう仕事をやつただ。夏は建築作業。

ソ連は共産党だもんで、共産教育を受けただ。シベリアであつた。共産主義になつたものから帰してやると言われて、なつたふりをした。家族には言わなかつた、帰るために。座学だなあ。毎日行われた。共産党に、なりきつたもんから帰してくれただ。それで船に乗せてくれた。玄山は北朝鮮だもんでねえ、あんまり寒くなかつたけど、ナホトカ行つた時はだいぶ北だもんでねえ。凍傷にかかつたこともあつた、病気になる人もいたねえ。収容所から逃げ出すわけにいかんもんでねえ。鉄砲持つてるもんでね。脱走することもできなかった。ソ連には一年くらいおつたかなあ。

## 共産教育に染まったふりをして帰国 家族と再会、喜び合う

昭和二十年、二十二歳頃の時、太平洋戦争が終わった。舞鶴に帰してくれた。舞鶴から名古屋のほうへ帰って、ほいでこちらのほうへ帰ってきた。抱き合って喜んで。(仲が良かった人は)玄山に上陸するとき、帰ってしまった。船に乗せられて、舞鶴まで来たただわねえ。一〇〇〇人乗つとるかわからんけど、船で帰らしてもらったただわね。一週間ぐらい乗ったかなあ。食事はいいもん食べてない、小豆の煮たようなものばかり。コーリヤンつうだかねえ、高黍たかきびを煮たようなやつ。船は日本の船、日本政府が出した。日本の政府が裏で交渉したんだらあなあ。(日本兵の)共に働いた五十人ぐらいも一緒に乗ったねえ。炭鉱にはソビエトの犯罪者もいた。五、六十人おったかもしれんね。内地に帰る時は嬉しかったね。帰ったのは春だったかな、でも寒かったね。船にトイレがないからね、甲板で垂れ流した。シベリア寒いもんでね、防寒服着たなり帰ってきたからね、舞鶴に帰ってきたときは、政府がただの切符をくれたもんでね、それで帰ってきただん。そのときは兄貴が足助の事務所勤めとって、それで家帰ったでね。嬉しかったね、家帰らしてもらって。家族喜んでくれた。ナホトカの収容所に入ってきたことは、ほら知っていたかもしれんね。帰ってきたのは、昼間。

家でちいっと百姓やつとたあ。うちのも



昭和三十年代の田町通り



昭和三十年代の八百己

ん家族おったけどね、兄貴と一緒にだもんでね、自分はやっぱり家を継ぐもんではないもんでね、一時はあの、百姓手伝ってたけど、家内のところに養子に行くって、話にでたもんで、それでここに養子に来たなんでね。鈴木と言う性だったけど、養子に来たもんで村上になったんだけどねえ。

\*鐘一さんの奥様の多美子さんからもお話を伺いました。ここからは多美子さんのお話です。

### 多美子さんにとつての戦争 今考えてみりゃ、勝てるわけがないがね、アメリカなんか

村上多美子です。おじいさん（鐘一さん）より三歳年下で、大正十四年三月二十九日生まれです。

B 29が来ると、ふるったねえ。みんな勝つと思って言ったね。勝つ！ 絶対勝つ！ 戦争の時は朝晩提灯をぶら下げて。ただ勝つの一点で。娘の頃だね、戦争が始まって。「見よ東海の〜」って四、五人で歌って、\*武運長久ぶうんちやうきゆうを歌っていったですよ。みんな\*日参もした。千人針を縫ったり。勝つてもらうぞ、勇ましくなんつってね。送り出しちゃ、送り出しちゃ、旗持って兵隊送ったなあ。私も竹槍を持って、やあつて。

近くにどんどんと、爆弾が落ちたこともあった。

今考えてみりゃ、勝てるわけがないがね、アメリカなんか。戦争やめたほうがいいねえ。戦争、まあ！ やめたほうがいいよー！ 商売は多少売れたかもしれんけど、普通にやったね。

おかゆ、野菜がいっぱい入ってご飯がつかない。戦時中は統制で。配給でいろんなもんもらって足らんことがあったね、お米なんか配給で。\*二合三勺にじゅうさんじやくつってなあ。芋粥を食べたりねえ。ご飯が足りないもんでね。お米が買えんかったもんでな。戦争の前はおじいさん米を持つちゃあね、山ヶ谷で米ができるもんね。駅裏に行つて物々交換もやってたみたいよ。砂糖も配給で。配給もいろんなもんが買えんでなあ。よかつたなあ、爆弾が来んで。飛行機がこんだけでもみんな喜んだね。戦争

が終わってやれやれと思って、本当にやれやれだったね。戦争が終わって、鐘一さんが養子に來ただわね。

\*武運長久 出征した兵士がいつまでも無事なこと

\*日参 神社や仏閣に毎日お参りすること

\*二合三勺 米の配給量。三四五グラム。米の配給量は、戦後にかけて、二合五勺 ≒ 二七五グラム、二合三勺 ≒ 二四五グラム、二合二勺 ≒ 二三五グラムと減っていき、遅配、休配が続いた。

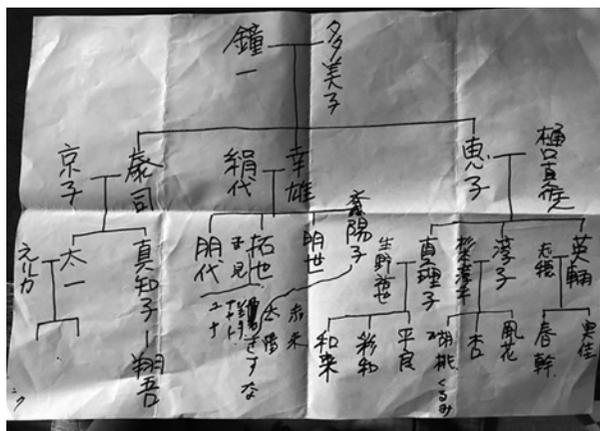
## 足助の伝承 一家の物語

八百巳やおみは、創業者は源次郎さんという人で。おじいさん（多美子さんの父悦二さん）は養子で、おばあさん（多美子さんのお母さん）が養子をもらって。実は岡崎のおじいさん（創業者の源次郎さん）には十二人くらいの子供がいてね、その娘だった私のお母さんが婿さんもらって店やって。弟が大きくなったから本店は弟がやって。お母さんはこつち（足助）に支店を出して、八百屋をやって。

女子青年でよく出て行って、会合なんかよくやとつたな。私が大きくなったもんで婿さんもらってね、あそこ山ヶ谷やまがから。鐘一さんと一緒になった。シベリア行っていたもんで、その後一緒になっただもんな。私は婿さんもらって。八百屋をやって。八百巳やおみつちゅうのは岡崎から來たでな。

## 多美子さんの歴史、八百巳の歴史 よう働いたよ、八百屋ひとすじに

はじめ小売ばっかりだったと思うね。鐘一さんは仕入れ、小売をやってね。魚もやっていた。こんにやくやら豆腐やら近





昭和三十年代の八百己

くで卸してもらって、野菜はお父さんが仕入れに行ってね、岡崎行ったり、ほら仕入れて買ってきてただわな。昔はそこに市場があつて、野菜も大島の方からも来てね。今の佐久間さんのところにもね、八百屋の野菜を持ってきて、売りにくるもんでそれを仕入れにきてなあ。仕入れにや、売れんわけだもんね。週に二回くらい行ったかな。私はこの従業員と働いとつたわけだね。野菜や魚やいろんなものを売とつたね、雑貨や。

昔は、電話で注文を受けちゃ、配達でこっちもまわつた。これ売ってくれんと言つて持ってきた人がおつたね。ほれを売つたりしてね。岡崎の方から仕入れたりにして、自分で売つたり。移動販売したりもしたねえ、稲武やら小渡やら。魚も魚屋さんが来て、売つたりなんかしてな。その昔は、従業員は三人ぐらしかおらんかつたね。一番多い時は五人ぐらいだつたかね。

鐘一さんと結婚したときは二人ぐらいだつたかね。鐘一さんと一緒になる前は、従業員が二人ばかりおつて、結構やつとつたよ。私の長男がね、東大紛争があつたもんでそこを止めて、そこで京都の大学に入った。

昔は水道がなかったもんで風呂場の、井戸で水を汲んではやつて。それで水道ができたもんでシャワーつと。商品を並べたり、商品の値段をつけたり、ほんなこと追われとつたんじゃないかな、お客さんの挨拶とか。六時には起きたんじゃないかな。おかたま、みんなの食べることもやらんといけない



昭和三十年代の八百己の店

し、惣菜もやったもんで、みなさんがおいでて惣菜を作ったね。お客さんのおいでるのを待つとって。九時頃開店。売ってあげたりね。午後も同じことをやったね、変わりばんこで。店番やる人とご飯食べるとでね。お惣菜作るとか。夜は八時とかだったかな。子供は男、男、女の順番でね。信用がなくなっちゃいかんもんでね。魚のあとが残酷で、綺麗に洗うのも難儀したね、血が飛んだりしてね。頑張ってきたよ、ほりゃ。私たち戦争を知る世代が引退して、目の前のことを一生懸命やる、それがなくなっちゃったもんね。

よう働いたよ。八百屋ひとすじに。豊信でお金預けると倍になることもあったね、バブル。昔はね、銀座通りなんてね、八百屋も辞めたし。昔はあんなに静かじゃなかったよ。医者もあつたしね、ここら辺寂れちゃったね。

\*家族などの食事の準備のこと

### パレット誕生秘話 本当によく頑張った、九十七歳

平成十年に、パレットを開店した。長男はね、大学に入れた、次男がパレットやってる。今で二十年になるでな、パレットができて。(足助の町中は)道路が狭いもんで、お客さん買い物みえて、車が置く場所がないから怒られちゃあつたで。これじゃあしょうがないつうことと、商工会から八百屋の組合を集めてあそこの場所があるで、誰かやる人いるかって言われた。ほいで八百屋の組合の五人かな、その中で息子が出て僕やりたいと言って。息子がパレットやった。それでうちがやることになって。ご理解を得てね。パレットを作る時、商工会で全部揃って決めただよ。惣菜屋さんも入ったし、パン屋さんも入って、薬局も入ったし。八百己は野菜と果物と魚、菓屋さんはなかったね。



現在のパレット

おかげでね、お客さんわりあい来てくれる。バイパスのトンネルもできたからね（平成二十年三月二十六日開通）。息子も研究してね、（八百己時代も）値打ちなものを安く買って、努力したと思うよ。一生懸命頑張ったもんで、ほいで孫もやるようになったし。おじいさんも家を造ってやったもんでね。店を開けて品物を揃えてよう頑張ってきたよ。わりあい平穩な毎日で、おかげさまで、みんなのおかげさまでねえ。バイパスが通ったし、病院もあるし、環境もあるで、今のパレットがあると思うんですよ。

炭鉱で働いてる時より八百己の方がいいわな、っておじいさん言ってる。おじいさん、今はここで居眠りしたりしてのんきに暮らしております。本当によく頑張った、九十七歳。

【聞き手・島塚土（桑田和町）】

取材期間 令和元年十月～令和二年九月

## あとがき

『足助の聞き書き』九集が完成しました。これで総勢七十五名の皆さんの生き様を記録に遺すことができ、足助の財産を増やすことができました。

私たちが活動する「聞き書き」は、人と人との関係を活性化し、歴史を紡ぐ役割を果たしていると思っています。「生」の声をまとめることで、足助で生きる「心」を記録し、継承できるものだと思っています。読まれた方との認識が異なるかもしれません。それぞれの話し手の方の記憶に基づいておりますので、どうぞ、ご理解ください。

令和二年、新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の事態になりました。三月から学校が臨時休校になり、四月には全国に緊急事態宣言が出され、不要不急の外出自粛やマスクの着用、三密回避など、様々な生活様式が変わらざるを得ない状況となりました。

私たちの活動も、新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮し、例年どおりのやり方を見直さざるをえませんでした。今年度は、聞き書き講座の開催を中止し、すでに話し手からの聞き書きをスタートさせていた聞き手の活動に限定し、話し手との接触は十分に留意した活動としました。そのため、第九集は作品数が少なくなってしまったこと、ご了承ください。

聞き書き作品には、今の時代の地域づくりに生かすヒントがあります。過去を残すことだけが目的ではなく、未来へつなぐ活動です。聞き書きの活動に若い人たちが関わることで、足助の地域づくりを活性化させることにつながります。そんな思いをもって、私たちは「足助の聞き書き集」の製作を続けています。

最後に第九集製作にあたり、貴重なお話を聞かせてくださった話し手の方々、活動にご理解とご協力賜りましたご家族の皆様、そしてこの事業を評価し応援していただいた足助地域会議委員の方々、足助支所の皆様、本当にありがとうございました。

あすけ聞き書き隊

これまでの聞き書き作品

第一集

- ・後藤 久子さん (足助町)
- ・岡本 忠雄さん (足助町)
- ・大山 鉦治さん (近岡町)
- ・櫻井 啓三さん (足助町)
- ・藪下エツ子さん (小町)
- ・鈴木 義郎さん (大蔵町)
- ・河合 成海さん (足助町)
- ・大山 光鈿さん (四ツ松町)
- ・川合 茂一さん (葛沢町)
- ・大山 清一さん (有洞町)



第二集

- ・松井 鑛弌さん (綾渡町)
- ・中野 義彦さん (足助町)
- ・塚田 忠博さん (五反田町)
- ・鱸 タミ子さん (中立町)
- ・林 和義さん (国谷町)
- ・柴田 信夫さん (則定町)
- ・山岡 彌さん (足助町)
- ・天野 雅夫さん (上佐切町)
- ・小木曾 舎さん (御内町)



第三集

- ・加藤八重子さん (桑田和町)
- ・山内 初代さん (足助町)
- ・高木 健さん (則定町)
- ・河合 茂さん (富岡町)
- ・成瀬 秀子さん (足助町)
- ・井野口よし子さん (足助町)
- ・板倉 晋蔵さん (白倉町)
- ・矢澤八重子さん (御内町)
- ・藤原 總助さん (足助町)
- ・加藤 綾子さん (足助町)
- ・内藤 剛さん (山ノ中立町)
- ・成瀬 義秋さん (富岡町)
- ・大河原千工子さん (野林町)
- ・梶 公子さん (野林町)



## 第四集

- ・柴田 鋼一さん (足助町)
- ・安藤 昭二さん (大蔵連町)
- ・柴田 豊さん (則定町)
- ・深見 レイさん (下平町)
- ・小野 君子さん (山谷町)
- ・杉浦 教昭さん (国合町)
- ・鈴木よし枝さん (足助町)
- ・小澤 浩さん (上八木町)
- ・近藤 敏勇さん (足助町)
- ・藤井 繁さん (足助町)



## 第五集

- ・筒井 敏夫さん (山谷町)
- ・磯谷 康夫さん (東大島町)
- ・松井りつ子さん (足助町)
- ・安藤 甲寿さん (上切山町)
- ・宇井 司郎さん (足助町)
- ・河合 愛子さん (富岡町)
- ・小澤 晃さん (上八木町)
- ・河合 三二さん (白倉町)
- ・本多 秀山さん (月原町)



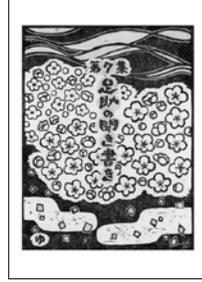
## 第六集

- ・宇井 鍵三さん (東渡合町)
- ・加藤 鏡一さん (月原町)
- ・水野修一郎さん (中立町)
- ・大山 守久さん (東大見町)
- ・小出 咲さん (足助町)
- ・宇野 司郎さん (足助町)



## 第七集

- ・天野藤雄さん (上佐切町)
- ・天野敬一さん (栃本町)
- ・市川鋭夫さん (霧山町)
- ・安藤正子さん (大蔵町)
- ・嵯峨茂子さん (怒田沢町)



## 第八集

- ・浅井ヨシエさん (足助町)
- ・鈴木義和さん (近岡町)
- ・寄田種子さん (綾渡町)
- ・梶 誠さん (野林町)
- ・安藤百合さん (連合町)
- ・内藤 茂さん (綾渡町)
- ・小澤庄一さん (新盛町)



足助の聞き書き 第九集

(話し手への取材期間 平成三十年九月～令和三年二月)

発行日 令和三年二月

発行行 あすけ聞き書き隊

mail : [kgf@asuke.org](mailto:kgf@asuke.org)

web : <http://kgf.asuke.org>

印刷・製本 三河印刷株式会社

\*この本は、令和二年度足助地区わくわく事業補助金を活用して製作したものです。